

老いて体が弱くなったとき、皆さん、それまでの暮らしを、あまりにも簡単に手放してしまうなあ。病院に入院したら安心。介護施設に入ったら安心。本当にそうでしょうか。

想像してみてください。ベッドの上から動けず、白い壁と消毒液のにおいに囲まれ、アラームを押すまでは誰も来ない！。そういう音のない場所で、最期のその時が来るのをじっと待つ。その時間はつらくはないのでしょうか。

最期まで、今までと同じ雑音があったら、いつも思いますが。まな板の音。みそ汁のにおい。誰かがそばに望む最期を迎えるため、私たちはどんな準備をすればいいのだろう。連載の締めくくりに、みとりを支える人たちにメッセージをもらった。

8 週近くの人が病院や診療所で亡くなる時代。でも病院には「家に帰りたい」と願う人が少なくない。なぜ帰りたいのか、ずっと考えてきました。病院では皆さん、患者の役を演じている気がしません。家と違って自分のテリトリーじゃないから気も使う。お客さんというか、いつもの自分じゃない。医師や看護師とも病気の話が主でしょう。入院のストレスは大きい。私は最期まで無理をして、患者になりすぎた。でも、これまでは家に帰りたい。でも帰れない人も多

### 安心は生活の音のある場所に 簡単に手放さないで



NPO法人もちもちの木理事長

たけなか・ようこ 01年、亡き夫寛さんとNPO法人もちもちの木を設立。08年から現職。中区と西区で認知症の人向けのグループホームなどを運営。

いる気配…。ベッドから起き上がれなくなっても、何らかの五感は働いていて、最期まで耳は聞こえている。いい配…。ベッドから起き上がれなくなっても、何らかの五感はあると心地いい。最期まで耳は聞こえている。いい配…。ベッドから起き上がれなくなっても、何らかの五感はあると心地いい。最期まで耳は聞こえている。いい配…。

竹中庸子さん(53) 広島市中区

ら、それはしんどい。自宅でもしんとして息が詰まる。ざわざわするのが暮らし。気が掛けてくれるなじみの人がそばにいて。食べて、好きなテレビ番組を見たり、おしゃべりしたり、何か楽しみがあつて。生活が次から次に展開する。病院や施設に行く最終的な目的って何でしょう。医療や介護サービスを受けることではない。元の生活を取り戻すことなんです。いま、それをもう一度、考え直してみる必要がある。どこでもいい。自分の暮らしが続けられるところが、ついのすみかになることを願っています。

### 最期の 迎え方

#### 第5部 メッセージ

#### 暮らしの延長線上で

聞き手は平井敦子

ものかイメージできなかった。33歳で訪問看護の世界に飛び込んで、カルチャーショックを受けました。自然に穏やかに旅立っていく。あるお宅では、終末期のおじいちゃんが畳の部屋で。おじいちゃんお父さんとして。その

東広島地区医師会地域連携室あざれあ室長

杉本由起子さん(49) 広島市



すぎもと・ゆきこ 訪問看護認定看護師。病院勤務、訪問看護の経験を経て、12年8月から現職。医療と介護、当事者の「つなぎ役」として活躍。

安心・安全

人がこれまで抱っていた役割のまま。家にはその人そのものがある。これまでは、そんな在宅の具体的なイメージが抱けず、病院のスタッフも在宅療養を勧められなかった面がある。でも今、国も旗を振り始めて在宅の支援体制整備も進み、在宅療養は選択肢になりつつあります。ご本人も家族も、私たち支える側のスタッフも、もう諦めるのはやめにした。い。そのための方法はいろいろある。がんでも、認知症でも、一人暮らしでも、家に帰れる街にしなければと思っています。